

聖書：マタイ 1：22～25

説教題：インマヌエル

日時：2018年12月23日（朝拝）

イエス様の誕生の様子についてはマタイの福音書とルカの福音書に詳しく記されています。興味深いことは、2つの福音書は別の視点から書いていることです。一言で言えばマタイの福音書は夫ヨセフの立場から、ルカの福音書は妻マリヤの立場から書いています。しかし2つの福音書が共通して述べていることがあります。それはイエス様は処女から生まれたことです。マリヤとヨセフはこの時、婚約期間にありました。婚約と言っても、当時のユダヤで二人は法律上の夫婦と見なされました。ですから19節で「夫のヨセフは」と言われています。このような婚約期間を通常一年間過ごしてから、二人は一つ屋根の下で住む結婚生活に入ります。ところがまだその期間が終わっていない内に（18節：「二人がまだ一緒にならないうちに」）、マリヤの胎には子が宿ったのです。それはヨセフにとってどんなに大きな衝撃であり、また悩みだったことでしょう。しかし主の使いが彼に現れて、「その胎に宿っている子は聖霊によるのです」と告げます。そしてその子に名を「イエス」とつけなさいと言います。数年前のクリスマス礼拝では21節までの部分を取り上げ、イエスという名の意味について説教させていただきました。そこで今日はその時は触れなかった22節以降からお話させていただきます。マタイはここでイエス様の誕生は旧約の預言者イザヤが預言した「インマヌエル」なる方の誕生であると言っています。インマヌエルとは「神が私たちとともにおられる」という意味のヘブル語です。つまりイエス様の誕生は「神が私たちとともにおられる」と呼ばれる方の誕生である。これは言い換えれば、イエス様は「神が私たちとともにおられる」という祝福を私たちにもたらず方であるということです。今日はこのことに焦点を当てて見て行きたいと思います。三つのポイントで見て行きたいと思います。

第一は、イエス様のこの処女降誕は何世紀も前に遡る神の準備と約束を経て起こったことであるということです。23節で引用されている言葉は、預言者イザヤによって紀元前8世紀のユダの王アハズに向かって語られたものです（イザヤ書7章14節）。イスラエルは当時すでに北と南に分裂していて、エルサレムを首都とする南ユダは危機的状態にありました。当時の世界の覇者はアッシリヤ帝国で、これに対抗するため、北イスラエルはアラムと同盟を結びました。しかし南ユダがこれに加わらないため、アラムと北イスラエルが攻撃して来たのです。その時の南ユダの動揺がイザヤ書7章2節にこう記

されています。「ダビデの家に「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。」この状況で預言者イザヤが主から遣わされて、アハズ王にメッセージを語ります。4節にあるように、「気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。」と。そして主にこそ信頼するように！と語ります。ところが不信仰な王アハズは主に頼らず、目に見える大国アッシリヤに頼ろうとします。彼は親アッシリヤ政策を取った人です。そんな彼に、イザヤは不信仰ゆえにさばきを刈り取ることになるだろうと預言します。アッシリヤに助けを求めた彼らは、逆にアッシリヤに攻め込まれ、飲みこまれてしまうと。17節：「主は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ臨んだこともない日々をもたらす。それはアッシリアの王だ。」しかしそのさばきの宣告のただ中でイザヤは預言します。あなたがたは大変な苦境を経験するが、神はあなたがたを見捨てたままにはされない。やがてインマヌエルなる方を与え、「神が私たちとともにおられる」という祝福を与えてくださると。このインマヌエル預言は、イザヤ書のこの後の部分にも出て来ます。8章8節と10節です。詳しく述べる時間はありませんが8章8節では、インマヌエルなるお方はユダが攻め込まれるその時、ご自分も苦しみをともにされるとということが述べられています。そして8章10節では、そういうことを経ても、この方が最後には勝利をもたらしてくださるといことが言われています（新改訳で「神が私たちとともにおられる」と訳されている部分は、ヘブル語で「インマヌエル」）。

さらにこのインマヌエル預言は9章の御言葉につながっています。9章1節に「しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる」とありますように、イスラエルはまず「苦しみ」とか「闇」と表現される期間を過ごします。しかし後に神はインマヌエルによる輝かしい将来を来たしてくださる。それが今日、招詞で読んでいただいた9章6～7節に述べられています。その誕生する一人のみどりごこそ、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる方。ダビデの家を堅く立てるまことの王なる方。その方による祝福がもたらされる日が来る！とイザヤは述べていました。当時の人たちにとって、これはいつなのか、またどのようにしてなのか、具体的には分からなかったでしょう。第一、処女がみごもるとはどういうことなのか。なぞのような言葉です。しかしイエス・キリストはまさにその仕方で生まれました。これはあのイザヤの預言の成就である！とマタイは述べているのです。

私たちはこのイエス様が誕生した当時の状況も良く考えに入れるべきだと思います。この福音書の冒頭にはイエス・キリストの系図が記されています。1章17節にまとめられていますように、この系図は3つの時代に区分する形で記されています。第1区分はアブラハムからダビデまで。ある意味で神の約束が着々と進行し、ついにダビデ王において頂点に達した時代です。しかしその後の第二区分はダビデから始まり、バビロン捕囚に至る時代。栄光の時代が続くどころか、イスラエルは南北に分裂し、歴代の王は神にそむいて衰退の一途をたどり、ついに外国に捕らえ移されるという悪夢の状態に至る。そして第三区分はバビロン捕囚からキリスト誕生まで。ここに出て来る人たちはほとんど無名の人たちです。墮ちるところまで落ちて回復するどころか、見る影もない状態。以前の栄光は消えさり、光はどこにもないというような状態です。しかしそんな時に、あのインマヌエル誕生の約束が実現した！「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。」という信じられないような出来事とその通りに起こった！神はご自分の民を見捨てたままにはしておかれず、必ず顧みてくださるという約束をこのように果たしてくださった！そのようにマタイは神を賛美しているのです。

第二に見たいことは、ではイエス・キリストがインマヌエルであるとはどういうことかということです。イエス様がインマヌエルであるということは、イエス様において「神が私たちとともにおられる」という祝福が私たちに実現するということです。これは反対から言えば、イエス様が来てくださらなければ「神が私たちとともにおられる」という祝福は私たちには与えられないということになります。なぜそうなのでしょう。それは一言で言えば、私たちが「罪」ある人間だからです。創世記から分かりますように、人間が最初に造られた時は「神が私たちとともにおられる」という祝福に生きていました。神と人間の交わりを隔てるものは何もなく、人間は神との豊かな交わりのうちに生きていました。しかしその関係を壊す出来事が生じました。それは創世記3章の、人間が罪を犯したという出来事です。その結果、聖なる神は、そのままでは罪人とともにいることはできなくなり、人間はエデンの園から追い出されました。こうして人間は神の臨在を失いました。そしてこのことがあらゆる私たちの苦しみや災いの原因であると聖書は述べています。しかし神はこのインマヌエルなる方を与えるという約束をし、この方において「神が私たちとともにおられる」という祝福を私たちの上に取り戻してください。どうやってでしょうか。それは私たちの罪の問題の解決なしにはあり得ません。そのため、この方は処女から生まれる必要があったのです。もし普通の方法で生まれて来たら、その人は罪人です。その人は原罪を引き継いでいます。それでは他の人を救う

ことはできません。他の人を救うためには、まず自分自身、罪がないきよい人でなければなりません。そのため、処女降誕という方法が必要だったのです。この場合、その方法で生まれる子どもがきよいのは母親が処女だからではありません。たとえ処女でも罪人は罪人です。その生まれる子が罪から守られるのは、その懐妊が聖霊によるからです。イエス様は私たちと同じ人間として誕生するため、マリヤの胎を言わば借りられました。罪人の胎が用いられながらも誕生して来る子が一切の罪から守られたのは、ただ聖霊によったからというのが聖書の説明です。

ではなぜ私たちを救う方は罪のない方でなければならないのでしょうか。それは私たちを罪から救い出す方法は、罪のない方が私たちの罪を担い、私たちの代わりに罰せられるという以外にはないからです。罪は簡単に洗い流せるようなものではありません。それが処理されるためには、代わりにそれを引き受ける人が必要です。その役割をこの罪のないインマヌエルなるお方が果たしてください。しかもこの方は神なるお方です。先ほどのイザヤ書9章6節にも「力ある神」とありました。神である方が人となり、十字架上でささげてくださるいのちは一人や二人、あるいは十人や百人ではなく、無数の人々を救うことができる価値と力を持っています。そうしてこの方はご自分により頼むすべての人の罪を取り除いてくださることができる。そのようにして罪を赦された者たちの上に「神が私たちとともにおられる」という祝福は実現するのです。神との豊かな交わりが回復されることによって、失われていたあらゆる祝福が取り戻されるようになるのです。

最後3つ目に考えたいことは、私たちは果たしてこのインマヌエルなるお方により頼む幸いを知っているかということです。私たちは一人で生きて行くには弱い者です。いつも誰かに支えられながら生きています。特に困難にある時、自分のそばにともにいてくれる人が一人いるだけで大きく違って来るものです。しかしこのクリスマスの時、私たちに差し出されているのは、何と「神が」私たちとともにいてくださるという祝福です。これ以上のことがあるでしょうか。人生の色々な場面でも、また日々の歩みにおいても、この祝福を知っているかどうか、この神との関係に生きているかどうかは、私たちに大きな違いをもたらします。なぜならこの方にまさって強い力や存在はこの世にないからです。この方は全能の神です。その方がともにいてくださるのです。私たちはその方にすべてのことを頼ることができる。その方がともにいてくださることを知ることから来る慰めと力を与えられる。もちろん神がともにいれば、何でも私たちの願う通

り・思う通りになるわけではありません。神は私たちにあえて試練を与えていると言っています。私たちを愛する子として訓練すると言っています。しかし素晴らしい真理は、私たちがどんなに苦しく、辛く、悲しい状況を通らせられることがあっても、そこにも神がともにいてくださるということです。苦境の中で私たちは一人放っておかれるのではなく、神がそこに一緒にいてくださる。そしてすべてを用いて私の益となるように導いてくださっている。そのことによって私をより聖め、より成長するように取り計らってください。私たちは時に出口が見えなくて頭を抱えてしまいそうになりますが、その私たちの小さな頭を超えて必ず良いようにしてくださる。それは他のどんなことにもまさる幸いと言うべきではないでしょうか。

そしてこの神が私たちとともにおられるという祝福は、最後の素晴らしい状態とつながっています。イザヤはこのインマヌエルの祝福がもたらす最後の状態、素晴らしい究極の世界についても預言しました。イザヤ書 60 章 19～20 節：「太陽はもはや、あなたの昼の光とはならず、月の明かりもあなたを照らさない。主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの輝きとなる。あなたの太陽はもう沈むことがなく、あなたの月は陰ることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。」 これを見てすぐに思い起こすのはヨハネの黙示録の言葉でしょう。黙示録 21 章 23 節：「都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」 22 章 5 節：「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらない。」 私たちはこの世にあってなお様々な悩み、苦しみを経験しますが、その私たちの嘆き悲しむ日が終わりとなる日が来る。神ご自身が私たちと完全にともにおられて、私たちの目の涙をすっかり拭い取ってくださる日が来る。そして永遠に神とともに歩む栄光の日が来るのです。私たちはその御国に導き入れられるのです。

私たちはこのクリスマスの時、神が私たちに差し出してくださっているインマヌエルの祝福を知っているのでしょうか。「ともにいてくださる神」を持つ人生に歩みたいと願わないでしょうか。神はイザヤの預言を経て、ついにこの約束の方を送ってくださいました。私たちはこのすべてにまさる本当のクリスマスプレゼントこそを、この時、受け取りたいと思います。そしてこの方であって罪赦され、神がともにいてくださる祝福を味わい知り、日々この神に頼り、神とともに歩む幸いへ、そしてこのインマヌエルなる方に導かれて究極の幸いへと向かう歩みを導かれて行きたいと思います。